当時としては、私のような学部生は、こうするよりほかに仕方がなかった。フランスで修得した単位がいっさい東京大学での成績に反映されない状況は、たしかに少し矛盾しているが、その状況を私は当然のことのように受け止めていた。

それに、私にはこの二年間の留学をぜひとも必要とする理由があった。留学が決定した一九七六年四月の時点で、東京大学教養学科フランス科の四年次に在籍していた私は、卒業論文をどのように書けばいいものか苦慮していたし、大学院に進みたいという希望を実現する自信があまりなかった。論文の書き方をつかみ、フランス語の実力養成を図るうえで、この留学は願ってもない機会であった。

はたして、口頭発表、レポート執筆、筆記試験受験を、ほかのフランス人学生に伍して、すべてフランス語で行うという経験は貴重であった。フランス語の力を増強できたのはもちろんのこと、論文執筆のポイントも会得できた。要するに、論文とは、疑問を背負って、その解決を模索する過程にほかならない。そういう大小の過程を文章に綴っていくわけである。仏文和訳や和文仏訳に終始する当時のフランス科の授業に浸ってきた自分は、考えてみれば単純なのだが、こういうことが体得できていなかった。

心に残る担当教官との交流

ところで、前に記した科目を担当されていた先生方は、おしなべて私に親切だった。特にいまも印象に強く残っているのは、「比較文学I」を担当されていたビヤンヴニュという女性の先生である。

アルベール・カミュの一言説についての口頭発表を私が願い出たときに、先生は発表日の二週間前に原稿を提出するよう促された。私がそのとおりに提出すると、翌週に添削ずみの原稿を私に渡して、添削箇所を逐一説明してくださった。それをもとにして書き直した原稿を携えて、私は口頭発表をした。口頭発表といっても、ひたすら原稿を読み上げるといった体のもので、アドリブを利かせるどころではなかった。途中であまりに不安になった私が「おかしなことを言っていないでしょうか」と問いかけると、先生は「滑舌に注意すればよいです」と言われた。

ものの四〇分の「発表」であっただろうか。フランス人のほかの受講生たちを前にしての初めての経験に、私は極度の緊張を覚えた。それでもビヤンヴニュ先生は、翌週の回に、私の指摘した点の一つを取り上げて、「吉田君のおかげでそれがわかりましたね」と言われたし、二〇点満点で一八点の高得点を与えてくださった。「それ」とは何だったか、いまとなっては判然としないが、これを機に、ようやく人前でフランス語を話す度胸がついた。

地球上のどこにいても、情け深い人には頭が下がる。ビヤンヴニュ先生の私に対する配慮を偲ぶたびに、二年間のフランス留学の原点が先生との交流にあったことを思い知る。

そして、このような機会を与えてくれた、国際文化教育交流財団ならびに日本万国博覧会記念機構に、この場を借りて感謝申しあげたい。

本奨学事業は、日本万国博覧会記念機構（http://www.expo70.or.jp）の助成金を得て実施している

フランスでの二年間

大阪経済法科大学教養部教授
吉田（よしだ） 廣（ひろし）

国際文化教育交流財団一九七六年度奨学生。七三年富山県立高岡高等学校卒業。七六年フランス・ルアン大学留学、七八年同大学文学士号取得。七九年東京大学教養学部教養学科卒業。八二年東京大学大学院仏語仏文学専門課程修士課程修了。八七年同博士課程単位取得満期退学。八八年大阪経済法科大学教養部専任講師。九九年より現職。専門は言説分析。

日本航空機でフランスに向けて出発したのは、一九七六年九月のことで、夜であったにもかかわらず、青空のただなかへと上昇していくような気分だったのを、いまでも覚えている。それほどまでにフランス・ルアン大学での留学に対する期待が大きかった。

しかし、ルアン大学の授業がいったん始まると、自分の仏語力の低劣さに愕然とした。先生方の話すスピードは予期していたよりも速くて、またそれぞれに個人差があるものの、概してノートを十分に取れない授業が多かった。

日本より先にフランスの学士号を取得

私は学士課程に編入学した。フランスでいう文学系の学士課程とは、大学三年生の一年間を指す。私は近現代フランス文学科に在籍した。そこでは一〇科目の単位取得が義務付けられていたが、日本とは異なり、それより多くの科目を履修することができない。科目の選択には一定の自由が保障されてはいたが、フランス文学の四科目、比較文学の二科目、言語学の二科目は選択必修であり、残りの二科目のみが自由選択であった。

当初、絶望に近い気分を味わった私は、一年間でこれらのすべてに合格する自信がなかったので、二年に分けて単位を揃えることにした。幸いなことに、一年目には「十七世紀フランス文学」「十八世紀フランス文学」「比較文学Ⅰ」「比較文学Ⅱ」「言語学Ⅰ」「言語学Ⅱ」の単位を、二年目には「中世フランス文学」「十六世紀フランス文学」「十九世紀フランス文学」「二十世紀フランス文学」の単位を取得できた。だから、一九七九年三月に東京大学から学士号を授与される前に、一九七八年六月にルアン大学の文学士の称号を得た。

日本とフランスの両方の大学から学士号を取得するということは、グローバリゼーションの進んだ今日では考えにくい。けれども、留学ブームの草創期であった

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三一カ国の大学・大学院へ一七九名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国五一六名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。